

## 「TEA と質的探究」2024 年度第 1 回優秀論文賞の選出と委員会講評

「TEA と質的探究」優秀論文選考委員会は、理論・方法的発展に貢献する論文、および研究対象の理解や実践に寄与する論文という観点から、各巻一編以上の優秀論文を選出する目的で選考作業を行なった。その結果、以下の三編の論文を 2024 年度の優秀論文として顕彰することに決定した。

### 第 1 巻 第 1 号 掲載

豊田香・卒田卓也 論文

「単方向 TEA」から「双方向 TEA」を開発する試み ―不登校経験家族を事例として

TEA 研究の理論と方法の発展に寄与する研究として、選考委員会は本論文を選出した。多くの TEA 研究ではこれまで、他者や環境と相互作用する一人の研究協力者に焦点が当てられてきた。しかしながら、複数の人間が同時に焦点化されるべき事象、たとえば本研究のように家族を系統的に捉えるべき事象に対しては、協力者たちが互いに影響を与えながら変化していく過程の描出と分析が必要となる。この点で、本論文が提唱する双方向的な分析方法は、従来の方法の限界を越えより広範囲の事象への適切なアプローチを可能にし、TEA 研究の枠を拡張したと言える。

複数の人間の同時変化を描くために、TEM 図が複雑になることは致し方ないことなのかもしれない。しかし図というものは本来テキストの理解を促すものである。これは多くの TEA 研究に該当することであるが、特に複雑になりがちな双方向 TEM 図の作成にあたっては、今後の工夫が望まれる。

### 第 1 巻 第 1 号 掲載

中野祥子 論文

在日ムスリム留学生のヒジャーブ着脱行為をめぐる価値の変容過程 ―TEA による 3 名の事例分析

イスラム教文化はいまだ十分な理解を得られておらず、異文化の土地では様々な予断と偏見にさらされ、逆に当事者たちの不安を惹起し、人々の間に葛藤を引き起こすことが多い。特に女性が着用するヒジャーブは、その可視性の高さから目にした者の勝手な解釈を呼び込みがちである。イスラム教文化を体現する協力者たちのヒジャーブ着脱をめぐる認知と行動の変化を描出した本研

究は、異文化理解と葛藤解消の一助になると考えられ、選考委員会はこの点を評価した。また協力者の語りの引用や TEM 図・TLMG 図の明瞭さも効果的であった。

一方で「日本に在住していること」による制約、意味については、「自立して自由に楽しむ日本人女性の姿は彼女たちに刺激を与える」という結論にとどまっており、より深い考察がなされることが望ましく思える。たとえば、日本以外の国に留学しているムスリム留学生と共有できそうな結果なのか、ヒジャーブ禁止をしていない他の自由な国ではどうなのかといった考察の敷衍が今後期待される。

## 第2巻 第1号 掲載

白崎智美 論文

小児医療における治療拒否の自己決定に関わる家族や医療者の苦悩や葛藤と相互理解 —TEM 図と TLMG による分析を手掛かりに

命(生と死)という峻厳なテーマを感情によることなく論を展開していた。人間の生き様の描写に説得力があり、ルポルタージュやドキュメンタリー番組に相当するような迫真性を感じさせる論文であった。当事者の苦悩や葛藤を EFP (および P-EFP) の組み合わせから3期に区分して整理することで、よりよい生を追究し納得のいく死が迎えられることを示したことは、特に学齢期を経て高等学校・大学・大学院等に進学して研究に従事し始めた初学者等には、誠実に研究対象に向き合うことの意義を一定の迫力をもって訴えるものとなる。

「協働することで、それぞれの葛藤が調整されていく」ということは、「治療拒否の自己決定」が受容される中で自明の論理という指摘も寄せられる可能性がある。しかし、一人ひとりの生と死をめぐっては一般的・普遍的な解がないことに鑑みれば、むしろ相互理解に基づく自己決定を尊重できるようになるまでの協働のプロセスが不可欠であることが確認できたと捉えられる。一点注文が許されるのであれば、「アスカさん」という協力者を HSI によってひとまず社会文化的に構築された集合的個人として抽出し、個別性を追求した本論文の記述に組み込むことで、社会や文化と相対的に独立な個をより一層強調できたのではないかと思われる。これは TEA 研究の目指すべき一方向である。

今回およそ二十編の論文から数編を優秀論文として選出する作業は、非常に難しい作業であった。月並みな言い方であるが、甲乙つけ難い印象であった。また TEA 研究に限らず質的研究は一般に記述が厚く、読み込むことの困難と同時に、様々なテーマや方法に触れる楽しい時間を過ごすこともできた。テーマを設定し、データを採取、分析し、まとめ上げ掲載にまで至るプロセスは大変なものであったと思う。また査読、編集にあたった委員の努力も相当なものであったと思量される。投稿者と査読者および編集委員の協働に敬意を表したい。

研究というものは伝統と革新の両面を備えているものと思う。新たな対象を開拓すること、理論や方法論を拡張することにおいて、TEA 研究者たちの意欲と実行力は極めて高く、若い学会らしく頼もしい限りである。それと同時に、伝統の側面もまた常に見返られ、TEA が提唱されたときに設定した目指すべきものを見失わないようにすることもまた肝要である。

今次の選考を通して当委員会が思いを馳せたのは、この伝統的側面である。TEA(複線径路等至性アプローチ)とは、HSI(歴史構造化招待)、TEM(複線径路等至性モデリング)、TLMG(発生の三層モデル)の三位一体で成立するものと当委員会は考えていたが、それが成立していない研究が散見された。TEM だけでは発達(微視発生)研究とどこが異なるのであろう。TLMG だけでは社会文化的研究と呼ぶのが適切なのではなかろうか。HSI を行なわないのであれば、社会・文化と個の関係が問われなくなってしまうだろうか。どれかが欠けていても TEA なのであろうか。この TEA のアイデンティティをめぐる問いについては、これからの研究者たちに今一度熟考を促したい。

また、諸概念の用法についても、再考が必要ではないかとの懸念を有した。一つ挙げるとすれば、SD(Social Direction)、SG(Social Guidance)の用法である。これは「社会的」諸力であるが、個がこうむる制約一般の意味で使用されているケースが多いように思われる。たとえば、事故によって身体的障害を負った場合、その障害を SD と記すようなケースである。その障害が社会・文化によってどう意味づけられ、人々のどういう言動によって協力者に受け取られているかを示すのが本来の SD(あるいは SG)の用法ではないかと思われる。

伝統と革新の両側面を大切に、新しく良質な研究がますます公刊されることを祈念して、選考委員会の講評を終えたいと思う。

2024 年度「TEA と質的探究」優秀論文選考委員会（五十音順）  
大嶽さと子・尾見康博・森 直久・山口洋典